

この運動の中心的担い手とされる典型的のビュリタンのヌミディア農民巡礼者集団キルクムケリオーネスについて、その実態が解明され、終末的・殉教志向の性格が明らかにされている。結論として、このキルクムケリオーネスを中心とするドナートゥス派の運動は、政治・社会上の改革を意図するものではなく、「内的プロレタリアート」による典型的な宗教運動として位置づけられている。最後の第七章では、キリスト教の勝利とローマ帝国の没落との関係が語られているが、アウグスティヌスがアフリカで伝統的なビュリタニズムの系譜の上に立つ農民型の信仰をもち、その点でドナートゥス派と同じ基盤に立っていたことが特に強調されている。

本書の内容である初期キリスト教とローマ帝国の関係については、ローマ史とキリスト教史の両面から莫大な研究蓄積が生み出されており、わが国でも重要テーマについては比較的よく論じられてきているが、最近では若手研究者を中心に史料と研究史の精力的な整理と吟味が行われ、プロソポ

グラフィッシェな研究成果の受容など研究の新たな深化の方向も獲得されつつある。かかる時点にあつて、多くのモノグラフを通じてコンスタンティヌスの問題などに重大な発言を行つてこられた新田氏が、平易な叙述を通してではあれ、御自身の業績を主軸に通史的なまとめをなされたことは、まことに貴重であるといわねばならない。

また、迫害時代のキリスト教徒審問について述べた際、総督とキリスト教徒との間に交された対話をそのままの形式で引用するなどビビッドな叙述が行われ、近世日本のキリスト教政策と比較して論ずる部分もあるなど、専門外の人にも大いに興味深い一書になっている。とりわけ、国家と宗教の関係を考える際に本書は多くの示唆を与えてくれよう。ハンディな書であるだけに、広く各方面の方々に読んでいただくことを期待したい。

（新書判 二三四頁 一九八〇年七月
教育社 八〇〇円）

（南川高志 京都大学大学院生）

四 電^し孝^{かこう}輔^{すけ}著

『侍従武官日記』

「大正」期はその前後に比して天皇の存在の薄い時期であつたといえよう。それは大正政変の時に詔勅の權威が吹き飛んだこと、そして「御大典」は行なわれたものの当の大正天皇が病弱だったことによるであらう。天皇の病はその後進行し、一九二一年には摂政を置かざるを得なくなる。

さて本日記は「昭和軍事叢書」の一冊として刊行されたもので、海軍大佐四電孝輔が一九一七年二月に侍従武官に任ぜられた時から一九二六年十二月の大正天皇の死まで（この間二三年十二月免侍従武官、二五年十二月任海軍中将）の間の宮中日誌である。ただ政治上の枢機にわたる事項は多くないし、例えば宮中某重大事件についての記述もとりいっぺんのものである。それでも、その筆使いは『木戸幸一日記』を思わせるし、宮中儀式の記述は詳しく（図解入り）、軍人の拝謁記事も多い（特にシベリア出兵に関して）。その意味では、本日

記は侍従武官という立場からいわば「菊のカーテン」の向こう側の世界をかいま見せてくれる。摂政設置前後の宮中の暗い雰囲気の記事、摂政設置決定後に大正天皇が不快の表情を示したとの記述もある。

ただし本書は日記全文ではなく抜粋である。凡例によれば、宮中の状況・政府要人や軍首脳の動きに関する記事はほとんど余すところなく集録し、家庭内の私的な事項は相当部分を省略したとのことである。日記原文はカタカナであったが本書ではひらがなに改められている。

以上、本書は、一応非政治化(?)されたかにみえる宮中が支配体制内で実際にどのような機能を果たそうとするかの一端を示す点で、近代天皇制の変遷を具体的に跡づける際の興味深い資料であるといえよう。

(四六判 四六三頁 一九八〇年十二月
美濃書房 三三〇〇円)
(松延秀一 京都大学大学院生)

Tüngen Golte

Repartos y rebeliones:

Túpac Amaru y las contradicciones de la economía colonial

本書は、*Warenverteilung und Bauernrebellionen in Vizekönigreich Perú (1751-1783)*, Berlin, Lateinamerika-Institut, 1977 の西語版である。原書刊行三年に上ルヘルの Instituto de Estudios Peruanos から西語版が刊行されたのは、一九八〇年がいわゆるトゥバク・アマルーの総反乱二百周年にあたることが背景になつていたと考えられる。

トゥバク・アマルーの総反乱を「反植民地主義運動、社会正義と政治的独立運動の復権者にして先駆者の運動」と解釈したダニエル・バルカルセルの古典的著作 *La rebelión de Túpac Amaru, México, F. C. E., 1947* の評価は、かなり一般的なものとなつてゐる。一九七一年に *Colección documental de la Independencia del*

Perú の第二部として、三巻からなる「トゥバク・アマルー反乱」史料集が刊行されたところから、そのことは察知できよう。

しかし、七〇年代になって、従来の研究では等閑視された諸側面の解明が試みられつゝある。Flores Galindo et al. *Sociedad colonial y sublevaciones populares: Túpac Amaru II, 1780*, Lima, I. N. I. D. E., 1976 に所収された諸論文では、反乱参加者の社会的構成、反乱参加者を結合していた「世界観」をはじめとするイデオロギー的諸側面(ミレナリスモ・ナティビスモなど)総決起を可能とした地域的ならびに全般的情勢などの分析が提出されている。本書の著者は、一七五一年から一七八〇年の間にリマ副王領に導入されたレバルト制(repartoあるいは repartimiento mercantil, repartimiento de efectos)にともなう植民地経済体制の動向に焦点をあて、一七六五年から一七八三年の間に継続的に生起した農民反乱、農民闘争との関係を究明しようとしている。レバルト制は、副王領の地方行政体の長であるコレヒドールが、